

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑦

日々の営為の中に、ただそこにただで知らず知らずのうちに「感じる力」が備わってきたのかも知れない。それはいわば風土の持つ力なのだろうか。私は、今宵まできた時間と空間を顧みている。

自衛隊を定年退職後に、各種のコンサートに、企画運営やラジオ番組などの制作を行う会社を設立出来たのも、感じる

力」を育んでくれたおかげと感謝している。ふるさととは時間が経つほどに懐かしさ、思い出はつとていく。正月になるといつも朝日に輝いていた五葉山を思い出す。初めての出会いから三十数年が経つが、今度は自分の足で、ふるさとへの感謝を込めて一歩一歩思い出の中の「五葉山」に近づいていきたい。大股も、種山ヶ原も、そして五葉山も、心を呼び起こし、心と心、心を繋げる、そんな存在であり続けている。

【執筆者プロフィール】昭和二十八年四月十日

四日生まれ。四十七年、自衛隊に入隊。陸上自衛隊航空学校(三重県)卒業後、同ヘリコプター隊、同飛行隊、東北方面航空隊本部、仙台駐屯地等に勤務。その間、航空士として数々の災害等に出勤したほか、防衛史料館長、報道担当幹部、警備班長、広報室長などを歴任し、平成十九年定年退職。(東北メディアアクリエーション代表取締役社長、(有)メディア仙台相談役、(株)仙台景エフエム放送チーフプロデューサー、(財)宮城県航空協会顧問等の要職にある。また、コンサートプロデューサー及び仙台市内のFMラジオ番組パーソナリティとしても活躍。

「黄金色に輝く山」

宮城県仙台市 菊池 健一

「0530、TAKE OFF」。航空レスキュー隊機長からピンと張りつめた指示。朝五時三十分、薄暗い空に航空機が金属音を響かせながら仙台霞目飛行場をへりこプターは飛び立った。確か昭和四十九年か五十年であったように思う。正月休みを返上し勤務に就いていたときだった。「釜石市と大船渡市に林野火災が発生、周囲の山々に延焼する危険性が高い、早急な消火活動が必要」と自衛隊へ災害出動が要請された。

初体験となる災害出動に緊張し、胸の高鳴りを覚えて仙台を後にしたが、五葉山のこの光景は、数分後に始まる林野火災の空中消火活動を忘れさせるほどの衝撃を与えた。

すぐさま航空機が編隊を組んで仙台から三陸海岸沿いに釜石を目指し北上した。気仙沼の上空にさしかかった時だった。

三陸沿岸地域の気候は春先にフェーン現象を起こしやすく、林野火災を誘発することがたびたびある。その後も大槌町や

「山」をつくりだしている黒岩に、ホンシユウジカやニホンザル、ツキノワグマたちの営みにも思いを馳せていた。

積み重ねられていく時間と様々な情感が込められていく唯一無二の生活空間「ふるさと」。そこには新緑、紅葉、雪景色があり、小鳥のさえずり、雲の流れ、せせらぎの音がある。自然の営みの中

ケ原を一望できる物見山に、そして地域の人々の



大槌町林野火災時の空中消火、僚機の横を一緒に飛び火点に誘導ながら筆者自ら撮影(平成13年5月24日撮影)

エッセイ